

調査対象物質	分析法フローチャート	備 考
<p>[25]2-(1-メチルプロピル)-4,6-ジニトロフェノール</p>	<p><b>【大気】</b></p> <pre> graph TD     A[大気] --&gt; B[捕集 Empore Disk C18 10L/分×24時間]     B --&gt; C[溶出<sup>注3</sup> アセトン 10mL]     C --&gt; D[濃縮 窒素パージ 1mLまで<sup>注1 注3</sup>]     D --&gt; E[メチル化<sup>注3</sup> ジアゾメタン 3mL<sup>注1</sup> 室温、1晩]     E --&gt; F[濃縮 窒素パージ]     F --&gt; G[転溶<sup>注3</sup> アセトニトリル 1mL]     G --&gt; H[GC/MS又はGC/MS-SIM<sup>注3</sup>]     I[内標準添加 フェナントレン-d<sub>10</sub><sup>注3</sup>] --&gt; H   </pre> <p>&lt;注&gt;次に示す方法を採用した例もあった。</p> <p>1:アセトンによる溶出後の濃縮を0.1mLまで行い、メチル化をジアゾメタンでなく、ジアゾメタンエーテル溶液1mLで行った。また、測定機器としてCP-3800/1200Lを使用した。</p> <p>2:大気捕集後のEmpore Disk C18よりアセトン10mLで溶出させ、溶出液を高純度窒素により乾固させた。乾固試料に酢酸エチル0.2mL、メタノール50μLを加え溶解させた後、トリメチルシリルジアゾメタン0.6Mヘキサン溶液を10μL加え、室温で30分反応させた。再び高純度窒素により乾固させた後、ヘキサン1mLに乾固試料を溶解させ、フェナントレン-d<sub>10</sub>を1μg添加した。また、測定機器としてGCMS-Agilent 5973を使用した。</p> <p>3:溶出を超音波洗浄機により行い(アセトン10mL、10分間)、2500rpmで10分間遠心分離を行い、2mLを分取した。その後の窒素パージによる濃縮を0.2mLまで行い、メチル化を行う時間を1時間とし、窒素パージによる濃縮を1mLまで行い、アセトニトリルによる転溶は行わなかった。内標準物質の添加量を50ngとした。また、測定機器としてGCMS-QP2010、カラムはDB-WAX、長さ30mを使用し、GC/MS-SIM-EIで測定した。</p> <p>「平成18年度化学物質分析法開発調査報告書」 準拠</p>	<p>&lt;分析原理&gt; GC/MS又はGC/MS-SIM<sup>注3</sup></p> <p>&lt;検出下限値&gt; 【大気】 (ng/m<sup>3</sup>) [25] 3.2</p> <p>&lt;分析条件&gt; 機器<sup>注1</sup> GCMS-QP5050A<sup>注2 注3</sup> カラム Inert Cap WAX<sup>注3</sup> 15m×0.25mm、0.25μm<sup>注3</sup></p>